

松江城研究の最前線 わかったこととこれからと

日 時：平成23年11月26日（土曜日）13:00～

※パネルディスカッション：15:20～16:20

会 場：島根県民会館 三階会議室

出席者：コーディネーター 中井 均氏

パネラー 山上 雅弘氏

和田 嘉宥氏

松尾 信裕氏



司会（福井将介氏）

それでは予定した時間になりましたので、パネルディスカッションに移りたいと思いますが、開会の前に、中国・四国城館調査検討会会長の田中 義昭先生をご紹介させていただきます。田中先生、どうぞ。後ろのほうにおられます。（拍手）

続いて、本日報告していただいた先生方以外の、『松江市史』の松江城部会の先生方を紹介いたします。まず、城郭史グループのグループリーダーをお務めいただいている中井 均先生です。（拍手）中井先生は、現在滋賀県立大学の人間文科学部の准教授です。先生にはこの後のパネルディスカッションのコーディネーターをお願いしております。

次に、同じく城郭史グループの西尾 克己先生を紹介します。西尾先生は島根県古代文化センターのセンター長をお勤めです。（拍手）

続いて、同じく城郭史グループの乗岡 実先生を紹介いたします。乗岡先生は岡山市教育委員会の文化財課にお勤めです。（拍手）

なお、先ほど分野別報告をしていただいた大阪城天守閣の松尾 信裕先生、兵庫県立考古博物館の山上 雅弘先生もこのグループです。また、本日はご欠席ですが、城郭史グループには他に兵庫県立大学の先山 徹先生がいらっしゃいます。

次に、文献・歴史地理グループの堀田 浩之先生を紹介いたします。堀田先生は兵庫県立歴史博物館に学芸員としてお勤めです。（拍手）

なお、本日もご欠席ですが、山形大学農学部の渡辺 理絵先生も文献・歴史地理グループです。

続いて、建築史を担当していただく建築史グループには、本日はご欠席ですが足立 正智先生がいらっしゃいます。先ほど分野別報告をしていただいた和田 嘉宥先生が建築史グループのリーダーです。

最後に、土木史グループを紹介させていただきます。土木史グループのグループリーダーは河原 莊一郎先生です。河原先生は松江工業高等専門学校環境建築工学科教授です。（拍手）

続いて、渡辺 正巳先生です。渡辺先生は文化財調査コンサルタントを経営され、島根大学汽水域研究センターの客員研究員もお勤めです。（拍手）

それでは松江城部会の先生方の紹介が終わったところで、パネルディスカッションを始めさせていただきます。中井先生、山上先生、和田先生、松尾先生、よろしく願いいたします。

中井 均氏

コーディネーターを務めさせていただきます中井と申します。改めてよろしくお願ひします。実は1時間しか時間がないので、早速始めていきたいと思うのですが、今日は三人の先生から、松江城の縄張について、天守の修理の問題、それから城下町ということテーマにそれぞれ報告をしていただきました。これに沿いましていくつか論点を整理していきたいと思ひます。



中井 均氏

まず松江城の縄張なのですけれども、私も聞いていて大変興味深かったのは、東側の石垣についてです。我々はどうも松江城というと南から見るイメージがあるのですが、東側に石垣がそびえている。私は前に来たときに堀川めぐりの船に乗り、あれ良いですね、観光というよりは、あれで北側と西側に石垣がないというのがよくわかるのです。そういう正面性について、もう一度考えてみたいと思ひます。特に重臣屋敷も東側にあるということで、まず間違いなく松江城は東側が正面なのだということが物理的にはわかるのですが、ではなぜ東側が正面なのでしょう。山上さん、お考えをもう少しお話しただけないでしょうか。

山上 雅弘氏

今日の報告では少し時間を超過して申し訳ありません。私が考えております、なぜ東側なのかということですが、南北を主軸とする築城では、南側に向かって大手を開くのが通常だと思うのです。ですが、松尾先生のお話にもありましたように、元々の中世の末次・白瀉といったような町場が、築城に先行して、つまり築城の以前にかなり広い範囲にあったのではないかと考えられるのです。

そういう前提から考えますと、三之丸から大手門を出ると、いきなり町人地のほうに出てしまうというのが問題です。そうなると、堀尾家の重臣クラスが藩主と距離が置かれてしまうところから、まずは東側に一旦向いて、それから南に出たのではないかと考えております。

中井

ありがとうございます。特に東側については、今のお話にもありましたように重臣屋敷の問題もありますので、松尾さん、その辺りはどうでしょうか。

松尾 信裕氏

お城そのものを見ますと、やはり東側に重臣屋敷が固まって置かれているということもありますので、お城は東を向いているかなというイメージはあるのですが、城下町全体として見ますと、やはり大橋がかかっている南のほうに向いているというイメージを持ちます。お城から、例えば江戸に向かうにしても南に大橋を渡って白瀉を通って行くというルートですので、城下町としては南のほうに向いているというイメージを持っています。

中井

大変面白いですね。城は東を向きながら城下町は南を向いているという、松江では城と城下町のこの関わり方というのが大変面白いのではないかなと思ひます。

建築のほうで和田先生、例えば天守の正面性というどうしても附櫓の関係からいくと南側になるのだらうと思うのですが、その辺りはどうなのでしょう。天守を見る場合、やはり正面性というのはあるのでしょうか。

和田 嘉宥氏

天守そのものが南を向いているのは、宍道湖がありますから、これに向かっているのではないかと思ひます。ただ附櫓についてですが、後で取って付けたのではないかと説があります。これは松江城

調査研究会の西和夫先生が言われていたのですけれども、天守閣は方形だけれども付櫓は少し台形になっています。それで、あれは堀尾氏が富田から持ってきたものかもしれないということをちらっと言っておられました。

そこら辺りは今後検討しないといけませんけれども、基本的にはやはり南が正面だと言って良いと思います。この問題については、場合によっては風水とかそういったものも考えていく必要があるかもしれません。そこら辺りは私ではわかりませんが、基本的には先ほども言いましたように、海上からのアプローチとかそういった観点からにしても南だし、やはり南が正面だけれども、城下の広がりから東がメインの入り口になっているという、折れ曲がった形態というのはそれなりに理解もできていると思います。

中井

ありがとうございます。松江の城と城下の問題なのですけれども、松江だけではなかなかこれは解決できないと思います。この慶長年間(1596～1615)ぐらいの城造りには、そういう正面性みたいなものが出てきているのは間違いないようです。

今日は中国・四国城館調査検討会という研究会との共催ですので、それぞれの地域で研究されている方が沢山お見えです。そういった方々の意見もお尋ねしながら、松江城についてより深く切り込んでいけたらと思っています。とりあえず正面性みたいなものが松江城の縄張の中に実際にあるのかないのかというようなところを、『松江市史』の城郭史グループの一員でもあります岡山市教育委員会の乗岡さんが来て下さっていますので、岡山城の事例をご紹介いただけたらなと思います。

乗岡 実氏

岡山市教育委員会の乗岡といいます。岡山城は、実際には宇喜多秀家という大名によって慶長年間よりはもうすこし早い時期に近世城郭としての形成が始まるのですが、城下町を含めた全体、あるいは本丸の縄張りは明確に正面性をもっています。

城下町も含めての全体構造で言いますと、本丸は、位置が北東隅に非常に偏っている。岡山城には後楽園という庭園がありまして、観光ルートに準じて後楽園から旭川越しに城を見るのだと思っている方、あちらが正面だと思っている方がいらっしゃるかもしれませんが、あちらの方向には全く城下町がない。ましてや慶長年間には、後楽園はまだ出来ておらず城外でした。つまり、本丸は背後に旭川を背に負った形で、その北東方向は軍事的にも守りが弱い。逆に南、それから西側にだけ城下町が形成され、堀が幾重にも廻りそちらが正面です。

それから、城の最中枢である本丸の構造に限ってみても、やはり南西側に構造や施設のあり方が偏っています。いわゆる大手筋の方向です。

例えば、本丸に入る城門は全部で3ヶ所あるのですが、枡形の虎口があって、その前後を一ノ門と二ノ門で固める構造は、南西側の1ヶ所だけです。しかも、石垣の特徴で言いますと、そこには非常に大きな鏡石を貼り付けた石塁がある。対して、他の城門の石垣はそれほどのことはない。その枡形門を出たところには筆頭家老の屋敷、城主が池田氏の時代では伊木家という3万3千石取りの屋敷がありました。そういうことで、岡山城は松江城以上に明確で強い正面性を持っているという事例です。

中井

ありがとうございます。私は滋賀県にいる関係で、山上さんが先ほど紹介された彦根城につきまして少し述べさせていただきます。彦根城も慶長9年(1604)から築城が始まるわけですが、元々大坂城に向かった西側が大手正面でした。しかし、大坂夏の陣(1615)の後、今度は参勤交代との関係で東側に大手が移ります。このように、正面性は、敵にむかっての正面から参勤交代ということで完全に大手が

替わるというようなお城もあるのです。

そういう意味で、松江城の場合は、南から城下町に入り、さらにそこから直角に左に折れて東を正面にしてあの巨大な枳形に入り、さらに何回か屈曲して、最終的に本丸には今度は南側から入るといったような、そういう構造で造られたのではないかというのが今日の山上さんの報告だったと思います。それが、何と言いますか高石垣の構築された場所であるとか、あるいは櫓が並んでいる位置とかから導き出せるのではないのでしょうか。

それからもう1点は、そういった正面性というのは、単純に大坂城を向いているとか、参勤交代の終点の江戸を向いているとか、あるいは軍事的な問題だけではなくて、やはり風水みたいなものの影響があったのか無かったのか、ということです。これについては、『松江市史』の編纂で城郭史グループの一員として一緒にやっております兵庫県立歴史博物館の堀田さんがお見えです。堀田さんは、姫路城で城郭の風水といますか立地について、『姫路市史』においても既に著作がおります。城の正面性みたいな点について、堀田さんに少しコメントいただけたらと思います。

堀田 浩之氏

失礼いたします。まず松江城のお話からなのですが、『旧藩事蹟』という文献を見ますと、「松江城の大手の門口は東向きだけど、天守は南向きである。」と書いてあり、明治時代の地元でも、正面性について関心のあったことがわかります。つまり、天守の向きに着目すれば、大橋川を介した橋南の町屋や宍道湖上からの視座が考えられますが、山上の主要部への登り道や山麓の重臣屋敷が東側に位置するように、城郭の中核は東を正面とする意識は譲れなかったものと思います。そういう面で、城山付け根の南東麓方向に枳形虎口の「馬溜」があるのは、武士の論理による城郭本来の空間構成（東→西）と天守が誘導する城下・郊外からの視線（南→北）という「松江」地域全体の位相からの、二つの異なる方向性が融合した結果であるとも言えるのです。

なお、東大手ということで類例を探せば江戸城があげられます。東京駅からずっと西へ行くと皇居(旧江戸城内)に入っていくわけですが、地形の高低差にしたがい、海岸から山の手へと江戸城の正面性の方向が自ずと示されます。しかし、半蔵門の辺りから麴町といった江戸城の背後の空間について、考えを及ぼすことは少ないと思います。つまり、通常の城郭研究では「大手（防衛正面）」をまず意識してしまうことで、表裏の差を無意識のうちに生じ、背後の部分への関心を閉ざす傾向があったわけです。

正面性という観点から城郭史を考えた場合、特に近世城郭では見栄えの良さを追求してきちんと工事する所と、ある程度は未完のままでも良しとする所を併存させていたのではないかと私は考えています。その時に、理論武装として風水という思想が出てくる可能性があるわけです。玄武（北）、朱雀（南）、青龍（東）、白虎（西）という「四神相応」を地理上に見立てたものなのですが、大手正面（表）は南側で、裏手となる北側は（奥）を表現する空間となります。ただし、江戸城の場合、真北ではなくて西を玄武の方向に見立て直しているはずで、山の手の高台と、遙かに望む富士山の方向を玄武の奥行きとし、隅田川の低湿地や江戸の入り江を朱雀と見立て、北辺を流れる神田川を青龍とし、城下町の南に「虎の門」まで仕立てています。東西南北の方向に関係がないとしても、地形の（低→高）、それから川の流れの（下流→上流）という、大まかなポジショニングと動線の方向性が求められたのではないかと思います。

最後に姫路城の場合ですが、ここでは街道の付け方に注目しておきたいと思います。姫路城は三重の堀で出来ていますが、北西の部分というのは男山という山があって、堀がきれいに廻っておりません。城郭としては未完の部分を残して弱点と言えますが、正面の背後（裏）にあたるという位相の解釈なのでしょう。したがって城下の空間を確保しているのは、南と東の二方面です。ともに南の方は山陽道、

東の方は生野へ行く但馬道が通過していますので、街道という外部からの動線(視線)を城下に取り入れ、城と町に正面性を与える要因になったものと考えられます。正面性という当時の城と城下のベクトルを見いだすことで、近世城郭の空間特性の議論が、今後なされることになれば、と思っております。以上です。

中井

ありがとうございます。今まで縄張り研究というのは戦国時代の城に対しては盛んに行われてきましたが、しかし松江城でこうした縄張り自体を分析することが無かったと思いますので、今回の山上さんの報告につきましては、まさに新しい視点からではなかったのかなというふうに思います。

それからもう1点、山上さんの報告を聞いていて私が大変興味深く思ったのは、本丸の問題です。あれだけ広大な面積を持っていながら、実は建物がほとんど無いということです。山上さんの報告では、御殿を建てるつもりだったようです。しかし、堀尾氏の段階ではそれが出来なかったのではないかとことなのですが、その辺りについてもう少し、山上さんにお話していただけたらと思うのですが。

山上

この頃の、つまり慶長期ぐらいの築城では、例えば先ほどの姫路城などでもそうなのですが、池田氏による築城の時には天守が建つ南側に備前丸という郭がありますが、そこに御殿があったと言われております。それが慶長期以降、いつの段階かというのははっきりしませんが、三ノ丸のほうに降りてきたと言われております。

先ほどの彦根城においても、元和年間(1615～24)になって本丸の御殿が二ノ丸のほうへ降りてきます。このように、江戸時代の初めごろは、近世城郭では本丸そのものは詰の丸として使われるようです。特に天守が建つようなお城では、そこはいわゆる最終的な郭として維持されて、空間になっていくことが多い。例外ももちろんありますけれども、慶長期から元和期にかけてはそういう過渡期ではなかったのかなというふうに考えております。

そのように考えたときに、松江城は慶長12年(1607)に築城が始まるのですが、当初の設計と実際に運用していく段階でお城の城郭構造の変化・変遷がそこに見て取れるのではないかとことを推定して、本丸が広いわりに空間となっていることの原因を説明させていただいたわけです。つまり、元々御殿を建てようとして広い本丸を造ったものの、途中で詰の丸に変更したと考えています。ところが、私は知らなかったのですが、和田先生から実はその古い段階にそこにお屋敷が建っていたという文献があるということを知りまして、実は驚いているのですが、ともあれそういう経緯であるようなことを申し上げたわけです。

中井

ありがとうございます。そこで和田先生のご報告にありました『(竹内右兵衛書つけ)』の問題なのですが、本丸に元々あったと言われる、六間半に八間ですか、その建物というのは大きさからして御殿的なものと考えてもいいのでしょうか。和田先生いかがでしょうか。

和田

どうでしょうね、『(竹内右兵衛書つけ)』には「家」とあります。ところでこの史料には、本丸について、例えば一ノ門に関しては、その上に「走り(武者走り)」があったと記述されています。それから本丸の中には御薬蔵がありました。二間に六間半の建物です。多分これは天守の北西のほうかもしれません。それから天守の南には「御天守南ニ六間半ニ八間之家有之の由」と記されています。「由(よし)」です



山上 雅弘 氏

からはっきりとはしていませんが、さらに「今はなし」と『(竹内右兵衛書つけ)』は記しています。だから基本的にはそういった建物があつたということが伝わっていたのでしょう。時間が経って、いつの頃かにこれがなくなっていたということでしょう。

それからもうひとつ、「御台所」があります。これは、単に天守の御台所じゃなく、台所があるからにはそれにふさわしい建物つまり御殿が建っていたと言えるとも思います。

中井

ということで、実は山上さんの仮説が立証されるのではないかと思っているのですが、山上さんそのへんについていかがですか。

山上

是非そうあつて欲しいなと思っているのですが、もし今後チャンスがあれば発掘調査をしていただければと思います。二之丸からも唐津焼が出ていると聞いておりますので、そういった生活空間、たとえば台所のような場所をおさえて調査が行われ、その当時の遺物とかが出てくるともっと面白いかなと思います。

中井

我々は松江城というと植え込みのある広い本丸というイメージしか持っていないのですが、ひょっとすると慶長12年の築城では堀尾氏が本丸に御殿を建てていて、そこが居住空間ではなかったかということですね。

和田

「堀尾期松江城下町絵図」の中にも、本丸の南と北の方に付属の建物がありますので、これからの検討課題になってくると思います。ただこの絵図の表現は非常にラフなものですから、正確ではありません。この絵図をどう考えるかということは十分な検討が必要だと思います。

中井

ありがとうございます。今山上さんの話にもありましたように、実は彦根城でも天守の前に本丸御殿跡の礎石が現在もそのまま残っています。当初は山の上で住んでいたということが明らかなのですね。ですから私も山上さんと同じように、この慶長期の平山城というのは元々山上の郭に臨戦態勢で住んでいたのではないかと。それがあつた時期、面白いですね、大名っていうのは、上で住むのが嫌になって下に移っていく、山麓部分に移っていくのではないかと考えられるのです。今後、本丸も含めて発掘調査をすると面白いと思うのですけどね。

たとえば平城ではありますが、岐阜に加納城というお城があります。慶長6年(1601)に築城が始まりますが、絵図には本丸に建物が描かれていません。御殿がずっと二之丸にあつたということですね。それが近年岐阜市教育委員会の発掘調査で、本丸から大量に瓦が出てきています。何らかの建物があつたということですね。ですから、元々はどこでも慶長期の築城というと本丸にそういった御殿空間が存在したという可能性が非常に高いのかもしれない。我々が見ている姿というのは決して築城当時のものではないということですね。今回この山上さんの報告で、私も改めて松江城でも築城当初は本丸に御殿があつたのではないかなと思っております。

縄張りについてまだまだ議論をしなければならないのですけれども、時間の関係がありまして、次に天守の問題に移りたいと思います。今日の和田先生の報告で、私も含めてですね、松江城の天守というのは堀尾氏の時代に造られたものがそのまま今でも残っている、無骨なね、何というか戦国期の天守がそのまま残されているという表現がよくあるのですが、堀尾氏段階のものではないという話を聞いて、意外というか驚いたんですけれども、和田先生、松江城以外にそういう創建当時そのままではなくて、

今見ているようにかなり改修を受けている天守というのは他にもあるのでしょうか。

和田

先ほど紹介した報告書ですけれども、その中で神奈川大学の西和夫先生は、それと類似した例として犬山城をあげられています。犬山城は昭和36年から40年に解体修理が行われたのですが、移設説は考えられないそうです。部材からは移設を示す資料が得られなかったそうです。それで今の犬山城は現在地で増築されているということです。そこのところを読みます。



和田 嘉宥 氏

「1・2階と3・4階とでは材の古さや仕上げ方法に明らかな差異があり、3・4階は増築したもので、装飾的役割をする唐破風も部材から判断すると3・4階よりもさらに後の付加であることが判明する。すなわち犬山城は、慶長6年の創建時に二階建てのもの（入母屋屋根の館に小さな望楼）があつて、それを元和年間に3・4階に増築した。その後に唐破風の付加がされて現代の姿に至っている。なお3・4階の増築以前の小さな望楼が乗っていたと思われる痕跡が、創建当初からの部材である二階の小屋梁に確認できる。」

ということで、創建当時の姿は今の犬山城の姿とは多少違ったものではないか。それが程度立証されつつあるということです。犬山城の成立過程にならえば、松江城の場合も1・2階と3階以上では多少建築的にも変わるものがあるところから、特に4・5階では様子が異なること、望楼型であることが共通しています。このことから、犬山城に見られるような成立過程が考えられるのではないかとということなのです。

それからですね、部材そのものを見ますと、1階とか2階に残る古い材、粗い材料、これは皮付きや丸太をバサッと切ったようなもので、荒削りなものが何本もあります。最初はそういう材で1、2階が造られた可能性があるということです。

中井

ありがとうございます。どうも我々も今残されている天守が創建当時のものだというイメージが凄くあるわけですが、今日のお話によって、実は松江城の天守についてはまだまだこれから検討していかねばならないということがわかりました。建築史の先生方が調べて分析をされているので、ほぼそういう具合に変遷しているのだらうと思います。

日本最古とか言われていた犬山城の天守ですら、実は慶長以降の建て替えであるということが近年わかったということで、大変面白い成果ではないかなと思います。ただ、建築については我々素人に近いもので、なかなかパネルディスカッションにはならないのかもしれませんが、どうでしょう、山上さん。今日のお話を聞いて思われたこと、一言お願いします。

山上

ひとつは、お話を聴いていて考えたのですが、ちょっと話がずれるかもしれないのですが、富田城から資材を持って来ているのではないかと感じました。この当時の、つまり慶長年間の築城では、松江城も他の城と同じように新たな材で一気に造るのではなくて、かき集めてきて、いろんな建物などに使っているのではないと思うのです。現代の我々から見ると、建築というのは一気に必要な資材を集めて、バツと造ってしまうというイメージがあるのですが、この当時の建築・土木は、ツギハギと言ってはなんですけれども、ちょっとずつ材料を集めてきて時間をかけて造っていることが多いと言われています。

それから天守についての今日のお話は率直に言って驚きです。やっぱり天守といいますと、創建当初のものがずっとあるというイメージでおりましたので、これからもう少し天守についても検討し直していかねばいけなないなと思っています。ちょっと感想めいたことしか申しあげられませんが。

中井

松尾さん、和田先生の話をお聞きしながら、横で「うん、うん」とうなずいておられたので、松江城天守については相当興味深く聴かれていたなと思うのですが、すみません、何かコメントがありましたら。

松尾

正面観の話をもう一度させてもらいますと、歴史館にジオラマの模型が置かれていますよね。あれは、すごくわかりやすいです。今の松江城は、木が多すぎて正面も何もわかりにくいですね。木を取っ払った姿がイメージできるのは、歴史館にあるジオラマ模型ですので、模型をもう一度見られたら、あ、東に向いているというイメージを多分お持ちになると思います。是非見ていただきたいです。

中井

ありがとうございます。ところで今日のパネルディスカッションとは全然関係ないことですが、各地に残っている近世城郭は、明治以降に木が生えすぎて景観が非常にわかりにくくなってきている。今の松尾さんのお話は、聴かれている松江市の教育委員会の方なんかはこれからおそらく考えてくれることだろうと期待しています。

彦根城では、とうとう彦根の駅から天守が隠れて見えなくなってきたので、ようやく今、市のほうが驚いて、木を伐採するための検討委員会を作って、自然や環境の方と一緒に、この木は切っても良い、この木はだめというようなことをやっています。おそらくこれは全国的にこれから進んでいくだろうと思います。そこで初めて江戸期の、今おっしゃったような正面性というのが見えてくるのではないかなと思います。これはちょっと余談で申し訳なかったのですが。

天守については、山上さんが言われたその「富」の刻印なんですね。これは山上さんが今いみじくも富田城から移したと断言をされたわけですが、「富」は富むという意味なのかもしれないし、これはまた非常に問題なのですね。その辺は、和田先生はどうお考えでしょうね。その「富」という刻印については。

和田

正直なところよくわかりません。そういう可能性がないかということで、調査委員会では色々な角度から検討しているところです。

堀尾家の給帳を見ますと、大工は格式も高く、士分階級で、大工職で100石くらいもらっている人があることがわかります。松平氏の場合、大工というのは足軽階級なのです。堀尾家の大工に関しては、国宝化推進室でもいろいろ調べていますが、堀尾時代の大工の地位は高かった。そういった大工たちの働きも含めて、堀尾氏が富田から持ってきた材であると推測できるかもしれないということです。もちろんさらに検討する余地があると思います。

中井

おそらく、「富」と書いてあったら富田城なのだろうと私も単純に思ってるんです。そんな、松江が富むようにとかいうことで「富」と書いてあるわけでは決してなくて、これは富田から持ってきてるのだろうと。それはすごく面白い。私自身は今日和田先生のお話を聴きながら、大変面白かったことのひとつなのですね。元々堀尾氏は富田城に入っているということ。それから富田城で城普請をやっているわけですから、それを解体して持っていくというのは当たり前のお話でありまして、この辺りも慶長期の、全国的な城造りの特徴のひとつなのかもしれないのです。年輪年代でも慶長3年(1598)ぐらいという推定が出ているということになりますと、これも大変面白い成果だと思います。また、これを建築のほうでさらに分析を進めていただければと思っています。

もうひとつ、今度は城下町の話です。城下町についてまず一点、私自身が押さえておきたいなと思っ

たのは、これは城下町だけではなくて、松江全体に関わる話になりますけれども、よく言われているのは、慶長5年の関ヶ原の合戦の後、いったん堀尾吉晴は富田に入る。しかし富田は非常に狭い。だから松江に移したというわけです。

果たして本当に富田が狭いのか、ということですね。この点、私は決して狭くないと思っております。ですから、城下町につきましても、本当に富田が狭いから松江に移らなければならなかったのかという点について、少し議論をしたいと思うのです。それから松江の城下町の話にいきたいと思うのですが。松尾さん、どうですか。僕は富田は決して狭くないと思うのですが。

松尾

私がスライドを出したのは、ほとんどが実は近世城下町です。富田というと中世の尼子氏の城下町として、山城がありその麓に町屋が展開するというような形だと思います。有名なのが、まだ信長の段階ですけど、浅井を滅ぼした後豊臣秀吉が小谷城を貫きます。一時入ろうか入るまいか逡巡した後やはり狭いという思いで長浜を造ります。長浜はこの段階で成立した近世城下町なのです。それは琵琶湖に面するところにお城を造って、東側の内側にお城に向かう縦方向の道路を造って、そこに両側町の平面形態の城下町を造りました。

つまり、こういう町を造るのには小谷はたしかに狭かった。やはり、富田であれ小谷であれ、山城があってその麓、谷筋あるいはその山城の近くを通る街道に沿ったようなところでできる街村状の町、それだけではやはり近世城下町を展開するには難しい。だから領国経営という面からもやはり領国の中心、あるいは山根先生がおっしゃっていましたように、交通の大動脈を押さえられるような場所に出て行くというところからは、やはり富田は狭い、あるいは遠い。やはり辺鄙なところだったのじゃないのかなと。そういうイメージでやはり富田から松江へという移動はあったのではないかなと思っております。

中井

今松尾さんがおっしゃった大事な点は、近世城下町なのか、戦国城下町なのか、ということですね。私は決して富田が狭いと思っているわけではないのです。城下町を造る意味では、当然あそこは尼子時代から城下があったはずなのですが、それはあくまでも戦国的な城下町の在り方であって、近世の、ずっと松尾さんがパワーポイントで紹介されたような、ああいう城下町は造れない場所だということではないかと思っているのです。その点も踏まえて、山上さんどうですか、その富田と松江というのは。

山上

そうですね。富田はやはり地形的に言うと起伏が激しいというか、ああいうふうに街村を通して両側町を作っていく上では制約があったのかなと。領国の端であるということも併せて。それと山根先生もご紹介しておられますように、元々松江には既存の町があった、町場が存在したということで、松江にお城を移す。近世的な領国経路を行う上ではその必要があったのだらうと思います。

中井

ありがとうございます。そういう意味で、例えば富田には実は城下町といいますか、富田川の河床遺跡というのがありまして、江戸の初めくらいまで実はあそこには町が存在したわけですね。その調査、あるいは富田城自体の調査に関わってこられた、安来市の教育委員会の船木さんが会場にお見えですので、富田の状況を河床遺跡も含めてご紹介いただけたらと思います。

舟木 聡氏

安来市教育委員会の舟木でございます。富田城と城下町について述べよということですが、皆さんよくご存知のように、富田城は戦国期には尼子氏の居城でありました。その頃の城下町というのははっきりわかっていないのですが、今日会場にいらっやっています古代文化センターの西尾克己さんが発

掘された昭和55年の調査、「富田川河床遺跡」という城下町の遺跡ですが、ここの調査では5面の遺構面が見つかっております。一番上の遺構面が1666年、寛文6年の大洪水で壊滅した城下町。それから、一番古いところでは第5遺構面と呼んでいます、16世紀の第3四半期、およそ16世紀半ばくらいの遺構面が一番古いです。

さっき言いましたように、尼子時代の城下町の形状というのはよくわかっておりません。第5遺構面でも、井戸と石垣、石組みと呼んだ方がいいですかね、それが見つかるくらいではっきりわかりません。おそらく中世の富田城の城下町というのは、富田城が月山の中心にあります、その富田城の周辺に谷がいっぱい入り組んで入っております。大きなところでいうと新宮谷とか塩谷という谷がありますが、そういった場所に家臣団が屋敷を構えてそこに住んでいたと思われま。一般民衆とか寺院は現在の富田城の北西方向、ちょうど今飯梨川が流れている辺りですが、そこに城下町を形成しているというスタイルがどうやら中世のスタイルです。

おそらく近世に入っても、ほとんど基本的にそのスタイルをずっと踏襲したまま城下が存続したようです。それは、新宮谷にあります尼子家の旧家臣団の屋敷、たとえば県の史跡になっております新宮覚館を発掘していても、唐津焼ですとかわりと新しい遺物が出土します。ですので、おそらく堀尾氏の、近世初期の家臣団も、ちょっと推測の面があるのですが、昔の中世の家臣団の屋敷跡の平地が大きいので、そのまま利用してその辺に住んでいるのではないかと考えております。

城下町はですね、発掘の事例で言うと、完全に町人地とそれから寺社が並んでおります。発掘調査では、お寺があったと思われるところからはかなり高級な輸入品の陶磁器なんか大量に出土しますし、あとは大きな道路が、およそ南北方向でしょうか、6mだったと思います幅のかなり広い道路がドーンと真ん中に通ってまして、その左右に密集して長屋が形成されているという形状であります。近世の松江城のような広い城下町にはなかなか造りにくいところなのかもしれません。近世の城下町に造成するという面では、富田はかなり不便な地域だったのかもしれない。

中井

ありがとうございます。先ほど松尾さんの話にもあったように、近世的な城下町が富田では形成しえなかったということなのですね。今お話しにあったように、おそらく月山のタコ足状に延びていく尾根の間の谷に、城下というか武家地を造ったりすることは出来ても、それをひとところにまとめることが出来なかった。逆に言いますと、慶長5年(1600)以降堀尾氏が入ってきたときに、堀尾氏は家臣団を全部抱えていったん富田に入るわけですよ。ですからあそこに堀尾氏時代の城下町も確実にあったはずなのですね。しかしそれは、今舟木さんがおっしゃったように、毛利時代ですかね、尼子・毛利時代のもをそのまま使わざるを得ない。それではやはり近世の城下町は造れないということで、新しく城地の選定ということになるわけですね。

この事情は彦根でも同じです。井伊家が上州の高崎からまず移って入るのは佐和山城です。ここにはやはり戦国期の城下町がそのままあります。発掘をするとその時代のもも出てくるのですが、ここでも近世の城下町は造れないということで移動するのですね。ですから大事なのは、戦国時代の城下町はもうだめだということですね。新たな城下町を建設しないとイケないということになってくる。

そこでもう一度、振り出しに戻るのかもしれませんが、少し城下町の細かい話をする前に、じゃあ富田がだめだったら何で松江だったのか。元々の課題である、なぜ松江なのかという点について、お一人ずつ、松江の地の利といいますか、その点について一言いただけたらと思います。

松尾

理由はやっぱり、山根先生が最初に報告されたように地形の話が究極だと思っております。やはり日

本海海域から、美保関から中海に入って、そして大橋川を通ってきて宍道湖に行つて平田を目指す、そういう海運の大動脈は大きいなと思いますね。聞きながら、平田ってどんな町だったかなと思つたりはしたのですが、とりあえず白潟や末次はそういう水運の拠点で一定の集落、港湾都市があつたと。それは文書のほうでも紹介されていたかと思ひます。大人（おとな）と呼ばれる町人が住むような、自治も一定程度できるような町として大きな中世集落があつたのだなというのが見えます。そういうのを核としてですね、堀尾氏はそこにいた町人達を上手く自分の城下町の町人として取り込むことで城下町経営を成していこうと考えたのではないかなと思ひます。



松尾 信裕 氏

あと、湿地の整地についても、埋め立てて造成するというのは、この時期の大名はお城もがまん造れる大名ですから、土木工事は得意だと思ひますね。どれだけの規模の町を造るかにもよるでしょうけども、土木工事をしてこれだけの湿地を埋めるならこういうふうにしたらいいなというのは当時の大名はノウハウを持っております。やはり、ポイントは交通の大動脈ですね、それと領国の中心に近いようなところ、そういう視点で選ばれたのが松江なのかなと思ひます。

中井

和田先生いかがでしょう。

和田

「地銭帳」という史料があります。近世の出雲地方の町場を見ますと、例えば安来とかあるいは平田、今市あるいは古志とか、それから宍道、さらに横田とかいった所がありますね。たぶんそういった所は近世になってから町場となつたのではなくて、古い段階につまり近世以前に町場になっていたと考えられます。

この史料には白潟とか末次とかは載っていません。「地銭帳」が記されたのは松江が城下町になってからですから、末次や白潟が載っていないのは当然ですが、中世にはすでに町場があつて、新たに城下町を造る時、宍道湖・中海周辺を見まわすと白潟と末次が少し発達した町場であつて、ひとつの要地としてここが選ばれたと推測できると思ひます。城地をどこにするかということは色々検討されたと思ひますが、やはり松江を、白潟と末次を選ぼうというところで決められたのではないかと思ひます。

中井

ありがとうございます。山上さんにはちょっと意地悪な質問をしたいのですが、城を選ぶのが先なのか、町を選ぶのが先なのか。つまり、ここは要害の地だから松江に城を造るというのが堀尾親子にとっては先決問題なのか、ここは、交通の要衝だから、交通の要衝と言うのももちろん軍事的にも要害と言えるかもしれないけれども、町家があるから城を造るのか、ということについてです。城郭研究の立場からはどうなのですか。開府というか、要するに松江をつくらうとしたときにはどちらを選ぶのでしょうか。

山上

私は、今の質問については、まず町を選んだのではないかと思ひます。今日、山根先生のパワーポイントで見せられて特にそれを思つたのですが、やはり出雲国内での宍道湖、中海それから美保関など、あの辺の交通・流通経済を考えると、松江というところはどうやら出雲国の交通・経済の結節点にあつているというのが大きかつたかなと思ひます。

確か毛利氏の萩城の城地選定のときには、鴻ノ峰、萩、三田尻とか、色々離れている土地の中でどこを選ぶかということが議論になつたと思ひます。これに対して篠山城などでは篠山という場所は決

まっあって、その中の篠山・飛山、王地山という場所を候補にあげて幕府の裁可を得るというパターンがあります。松江城の場合は後者です。その場所の、実際にどこに築城するかということで議論があったのです。この場合は、荒隈山と亀田山のどちらにするかという、つまりもう松江は決まっあって、山をどちらにするという話になっていますので、私はやはり松江という場所が先に選ばれていたのではないかと思っあいます。

中井

はい、そういうことなのです。お城仲間なので城だと言われるかと思ったら、やはり近世というのはそういう時代なのだというのが、今のお三人の話から伺えるわけです。

ただこの問題に関しては、今朝ふと気が付いたことなのですが、松江を選んだのはなぜかというような一番根本の話題に対しては、今日最初に報告された山根先生の基調報告の中に入っっているのですが、山根先生はパネラーに入っっていない。これはちょっと騙されたのではないかと思っあいますね。そのコメントを会場にとるのではなくて、山根先生、突然振っって申し訳ないですが、これは本当に打ち合わせにはなかつたことですが、今のなぜ松江なのかという点についてぜひ山根先生のほうからお話をいただければと思っあいます。

山根正明氏

失礼します。シナリオになかつたことですのでちょっとドキマギしておっります。城か町かと問われれば、やはり町だと思っあいます。最初に見ていただきました足立不伝さんの「城地選定の図」などからも荒隈山か亀田山かという議論がされたと言われているのですが、私は堀尾父子にとっては荒隈山という選択肢ははじめから無しだろうなと考っえています。あの山の様子を見ますと、中世のいわゆる挟撃による殲滅戦という構想には合致した山容であろうと思っあいます。富田城もそうですね、尾根筋を四方八方に伸ばして、それぞれに大小の郭を造っって谷間を攻め上る敵兵を攻撃することには適していると思っあいます。しかし近世の、それぞれの郭がそれぞれの機能を持たされて、そのうえで一個の完結した城郭として機能するという、そういう城を造ろうとした場合、やはり選ばれるのは亀田山だと思っておっります。

中井

ありがとうございます。近世になると、単に軍事的要衝ということではなくて、いかに領内を支配していくかというところで、町を取り込んでいくことが重要だったというのがわかっただけと思っあいます。

私は戦国期から近世の城を専門にしているのですが、いわゆる縄張りというか、城だけを見る傾向が非常に強いのですが、やはり城が何でそこに造られたのかということ考っえないと木を見て森を見ずになっってしまうだろうなということ最近特に思っているんですけども。そういう意味では、この松江に城が造られたということについては、みなさん中世以来の町場があつたところに着目された、その次に荒隈山か亀田山かというところで選んでいったということに落ち着いたのだろうと思っあいます。

問題は、中世以来の末次あるいは白濁というような町場が、今度は城下町に当然取り込まれていくわけですけども、そういう中世以来の町場が近世の城下町の中に取り込まれていくというような事例は、例えば松江以外で、松尾さんあるでしょうか。

松尾

今日話しました大坂がそうなのですね。実は大坂には元々石山本願寺があつて、これが「摂津第一の城」といわれたところに織田信長が目をつけているのですが、太田牛一が書いた『信長公記』に出っているんですけども、西の瀬戸内海のほうからたくさんの船が来るのだと。唐とか南蛮だとかからたくさんの船が入っってくる「富貴利潤の湊なり」と書いてある。この湊は実は中世にあつた渡辺津なのですね。それ

を信長は取り込もうとします。

先ほどのお城か町かっていう話、大坂はどっちなんだろうかと思ったのです。本願寺があったなど思いながら考えていました。よく考えれば、信長はその横にあった渡辺津にも魅力を感じていたんじゃないかと思えます。もう一つ、その南に四天王寺に向けて伸ばした道があると話しましたが、四天王寺という大きな商工業都市があったのです。さらに豊臣秀吉の場合は、それを自分の町にしようとしています。四天王寺だけではなくてそのもっと南、10km ぐらい南にある堺も自分の城下町にしようとしています。つまり流通経済、商工業、そういうものを自分のものにしようとするわけですね。

松江にも、白潟とか末次という商工業・流通業全部あるような、この地域では兼ね備わった中世都市があるわけです。そういうものを自分の町にしていこうというのが秀吉です。信長もそうだと思います。安土にはその西隣に常楽寺っていう中世からの琵琶湖水運の港湾都市があります。すぐその横に新しい町を造るのです。それを自分の城下町の一角に取り込んでいこうとします。やはり前代の色々な商工業がにぎやかなところへ持って行って城下町を造っていくのではないかと考えております。

中井

ありがとうございます。堀尾氏はというと、出雲国には関ヶ原の戦功によってやって来るわけですが、実はそれよりも末次あるいは白潟の町の人たちのほうが古くからずっと住んでいて、それが新たにやってきた堀尾氏の城下の経営のなかで、うまく城下町の中に町人地として取り込まれていくのではないかと。当然それを取り込むために堀尾氏はここに城を築いたのだということがわかっていただけたのではないかと思います。

今日は、今私たちが携わっております『松江市史』の『別編 松江城』のために、調査あるいは勉強させていただいているなかでお三方のほうから報告をしていただいたわけですが、時間もまいりましたので、最後にお一人ずつ、最新の成果をもう一度みなさまにご紹介していただくような形で、パネルディスカッションを締めたいと思います。山上さんからすいませんが一言ずつお願いできたらと思います。

山上

今回松江城に来させていただいて、いろいろな経過とか資料を調べてまいりました。そこでの印象は、堀尾氏というのは、かなり綿密な築城プランを持っていて、並々ならぬというかかなりの勢いで松江城を造っているのだということがイメージとしてわかってきました。そして、私もメンバーなのですが、中国・四国地区城館調査検討会の中国・四国地方の視点から見ると、堀尾氏というのはこの地方に多い外様大名ですから幕府との関係というのは非常に現実的な問題でして、いろいろ制約があったと思います。堀尾としては城郭をこう造りたいのだけど、幕府との関係でここまででしか出来なかったという、松江城の縄張りを見て、そういうせめぎあいを見たような気がしました。

そういうなかでも、やはり堀尾氏というのは城下町の造成を含めて非常に努力をした。藩主家そのものは決して幸運であったわけではなく、いろいろな問題を抱えているなかで頑張ったのだということが見えてまいりました。私も一人のサラリーマンですので、いろいろな社会の状況のなかで、自分の夢が潰されそうになりながら頑張った姿が見えて、ちょっと感動しております。以上です。

中井

ありがとうございます。次に和田先生、お願いします。

和田

西先生の受け売りというか、西和夫先生から調査委員会に報告された内容のお話をします。実は昭和の修理の時に、建築関係の井上梅蔵という人が色々な記録を残しております。そのなかに、天守が改築

を受けたものじゃないかということをおっしゃっています。それがいつ頃かという、改築時期の問題が今後大きな検討事項になっていくと思われまふ。

西先生も「富」という字に注目され、それを年輪年代で調べたら古い部材であったということが明らかになりつつあります。また、天守が当初どういう形であったかということに関しては、もう少し検討しなければならなくなってきました。

それから現在、基本的な史料として、『(竹内右兵衛書つけ)』を翻刻しています。『松江城研究』の第1号が来春に出ますので、その中に発表しようと思っています。それを詳しく見てもらいたいのですが、単に「書つけ」それだけを単独で読むのではなくて、やはり「城郭図」や「縄張図」と一体として見ていくとその時代の姿がどうかということがよくわかってきます。そうすると、松江城には本丸・二之丸・三之丸とありますが、それらがどういう発展段階をたどってきたかわかってくるのではないかと考えています。

今興味を持っていますのは、奥御殿(「書つけ」にある「新御屋敷」というのはどういった性格の施設なのか、あるいは三之丸がいつ頃本格的に整備されだしたのかということですのでけれど、それらを文書史料だけでなく絵図史料などを通して調べていきたいと思ひます。

それから、松江の城下町についてですが、松江城下は道が江戸時代の姿のまま、つまり堀尾時代の絵図等の姿のまま江戸時代を通して継承されて現在に至っています。武家地は武家地で残っていて、町場は町場で残っています。雑賀町も古い姿そのままの町割りあるいは屋敷割りとして残っています。建物は無くなっていますけれども、道そのものは基本的に江戸時代の姿をきちんととめていているところが、松江のひとつの宝になっているのではないかと考えています。

中井

ありがとうございます。

松尾

今松江は、やっとその歴史が発掘というやり方で明らかになろうとしています。家老屋敷では大きな面積を発掘調査いたしております。そのお陰で、皆さんの前に、例えば歴史館の中の展示という形で、こういうものを使っていたのだということがわかってきています。

これ以外にも、城山北公園線と呼ばれる道路でしょうか、東西に広く道路拡幅しているところで、本当にこちらの行政の担当者の方は一生懸命やっておられます。そういうところからも、例えば城下町を造る直前の姿がだんだん見えてきています。大きな、幅が3m位で、深さが2~3mもあるような、幹線水路というのでしょうか、排水路というべきでしょうか、それとも、土地を乾かすためなのでしょう、そういう溝が、今の道路と同じ方向で、道路とは別の所で見つかったりしています。ひょっとすれば、それは城下町を造るための最初の第一歩の仕事だったかもしれません。そういうものをひとつひとつ明らかにしていきますと、松江の造成工事というのはもともと見えてくるのではないかなと思われまふ。それが見えることで、当時の城下町建設工事そのものの姿というのも見えてくるのではないかと思ひます。

もうひとつ、何でこの町を選んだかという課題に対しては、中世集落である白潟・末次の姿、これが見えてないのです。文献史料では見られます。何処かで発掘調査をして欲しいと思っていますが、個人所有地のところがほとんどですので、なかなか難しいとは思ひます。でも、文献からだけではなくて実際にものが見つかったら、今まで考古学者が何十年も近世城下町の発掘調査をやってきた成果で、城下町の形がわかりつつあるのです。松江でも発掘調査で確認されると、さらに城下町の出現期の形が明らかになるだろうと思ひます。法螺じゃなくなりますのでね。まだ今は推測ですが、実証されればと思ひ

ております、ということで終わります。

中井

ありがとうございました。壇上四人のなかで、和田先生以外は考古学をやっている人間で、「掘れ掘れ、掘れ掘れ」と言うのですけれど、私も本丸を掘ったら面白いだろうなと思っているのですが。

コーディネーター役の私が、最後に少し締めたいと思います。私は松江城の天守がすごく好き、というか日本で一番好きな天守なのです。あの無骨さというのが素晴らしく好きで、私は彦根のほうに勤めているのですが、彦根城の天守、つまり国宝よりも好きなのです。無骨さというのが好きだと思っていたのが、今日、ちょっと違うと言われてショックなのですけれども。でも今の姿は今の姿で、改修を受けて今の姿になっている。そういう変遷がこれからわかってくるとというのが大変楽しみになっています。

それから、我々三人は大阪、兵庫、滋賀から来ているのですけれども、昨日も仲間に「今からどこ行くんや」「松江、行くねん」「松江、ええな」と言われたのですが、松江に行っても普段は城をゆっくり見ることもなく、こういう演台に立って喋ったらすぐに帰るわけですが、今日はたまたまちょっと時間があって、三人でどこに行くのか決めようとしたら、三人が一致して「歴史館に行こう」となりました。そのとき、こんな勉強家はいないなと思ったのですけれども。(笑)

驚いたのは、一番最初の開館の時の図録「松江創世記－堀尾氏三代の国づくり」を買おうと思ったら、もう売り切れていたのです。松江で、堀尾氏の本が売り切れるなんてあり得るのかと思いつつも、これは素晴らしいことだなと思いました。やはり、その歴史を改めて掘り起こされた結果だと思っています。

今回、「松江城研究の最前線」ということで、縄張り、あるいは建築、さらに城下町の最前線の報告をさせていただきました。これについては、『松江城研究』という本の第1号が出ます。これを読んでいただけたら幸いです。

実は会場から質問を受け付けたかったのですが、1時間というパネルディスカッションのなかでは質問を受ける時間がとれませんでした。もしご質問があるようでしたら、教育委員会の史料編纂室のほうへ行かれて、「松尾が言うことはおかしいのではないか」とか「山上の発言はあり得ない」というようなことを言っていただければ、それを松江城研究のほうに活かしていきたいと思っています。

また、我々はこれからの市史編纂の過程で、たびたび寄せていただこうと思っていますし、今後もこういう機会を設けていただけたらと思います。そのときには是非またお越しいただいて、さらに松江城の研究の最新情報を知っていただけたらありがたいと思います。

非常にコーディネーターが下手で申し訳なかったのですが、お三方のご協力で、大変面白い成果が出たのではないかと思います。時間もまいりましたので、ひとまずこれでパネルディスカッションは終わりたいと思います。どうも最後までご静聴ありがとうございました。(拍手)

(この記録には、発言の趣旨を生かしながら加除した部分があります。ご了解ください。)